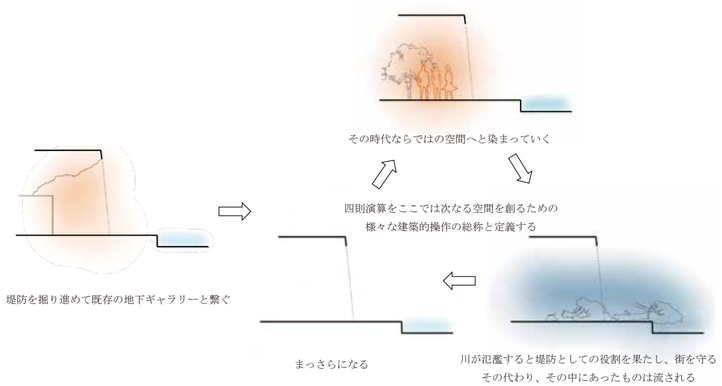
災（さい）演算

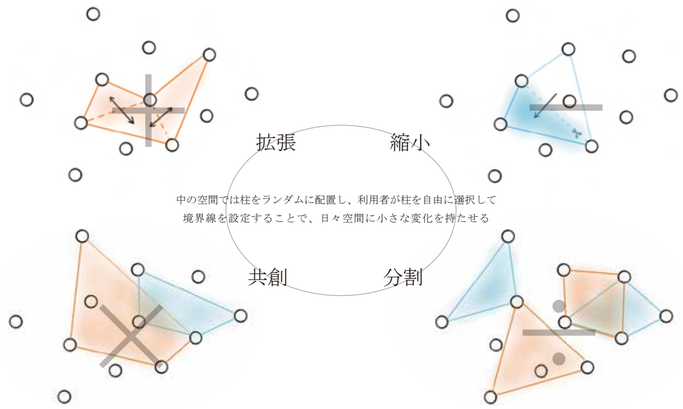
洪水とともに更新される船着場ギャラリー

堤防とは近代的な産物で、何かと何かを**高い壁で隔てる冷たい存在**のように感じる。
形を変えずにその場にあり続ける堤防に対して、私たちは**時代ごとに街の変化や社会問題に向き合える空間**にすることを提案する。
時代ごとに必要とされている空間に変わることができるということは、**持続可能な空間**を創ることにもつながるのではないか。

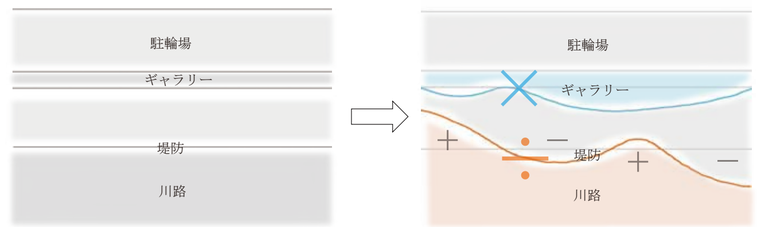
01: 四則演算的建築原理



02: 選択可能な柱による空間



03: 区画との方則の造形（平面的操作）

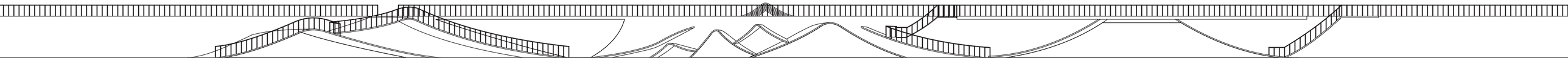


設定した敷地はもともと直線的に
それぞれの空間が仕切られている

× の造形　ギャラリーの壁を取り払い、境界線を
あいまいにし、ふたつの空間が交じり合う

÷ の造形　堤防内と川路を隔てる堤防ラインに対して
曲線的に堤防を設けることで、人を内部に呼び込む

＋－の造形　× や ÷ の行為によって、曖昧になった空間が
＋の空間（拡張）、－の空間（減少）を作り出す



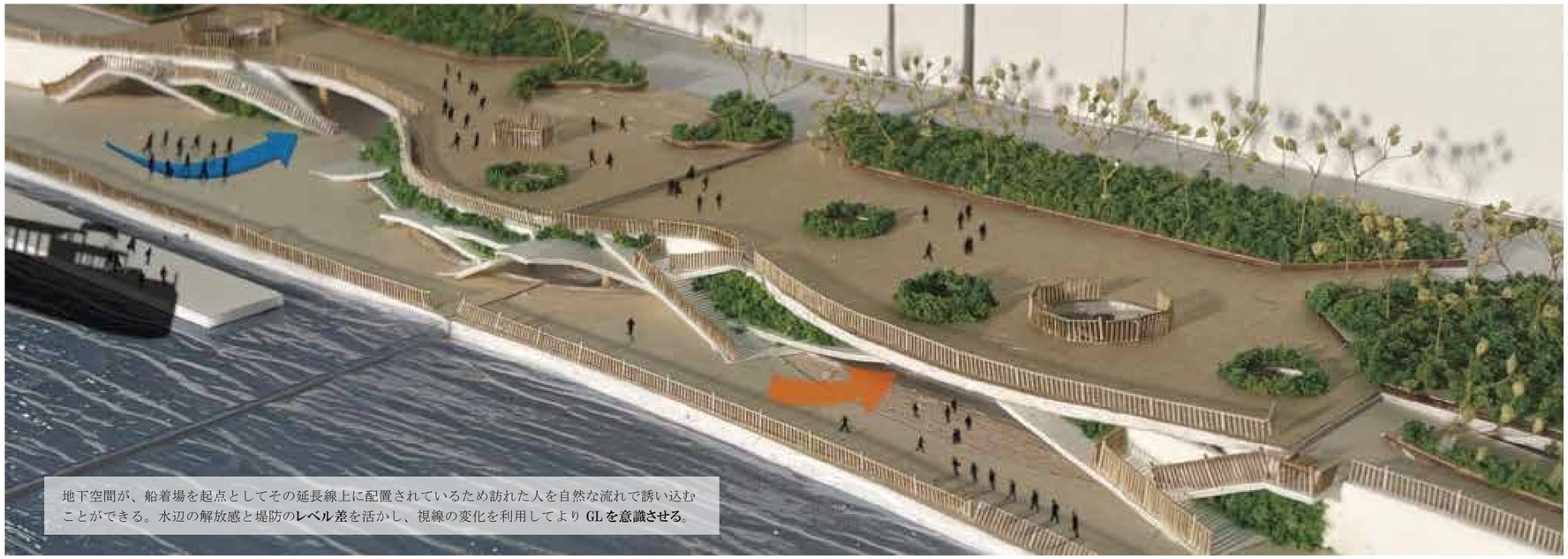
敷地

台東区立隅田公園

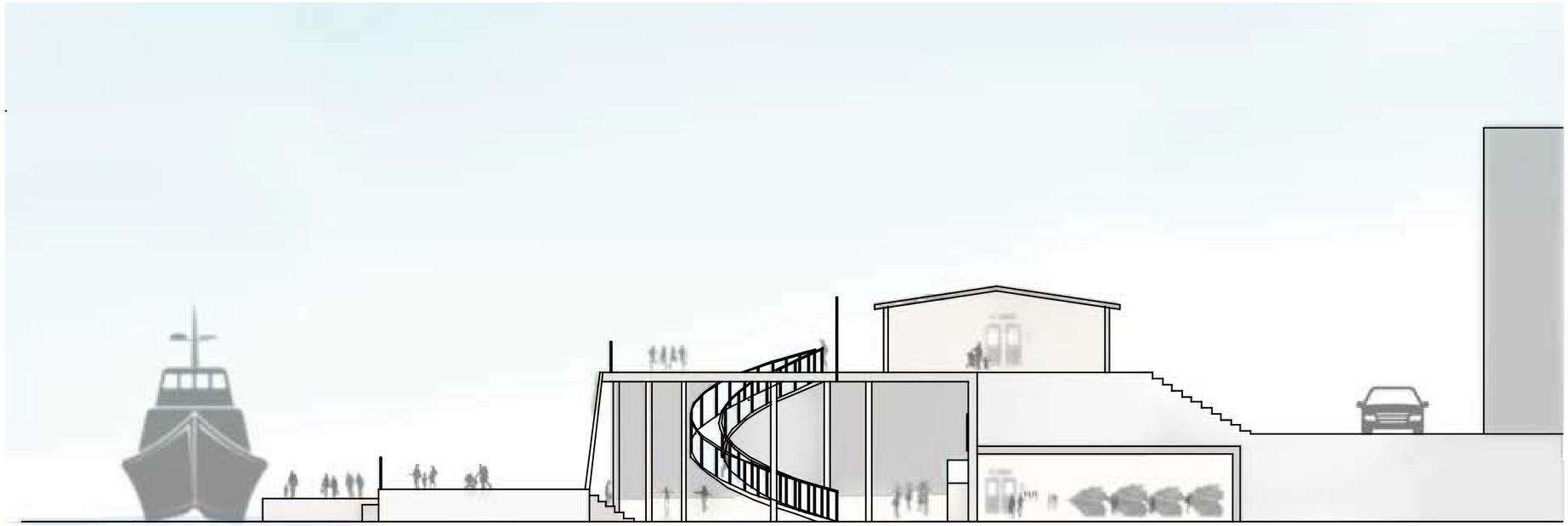
浅草駅から出てすぐの隅田川に沿う細長い公園であり、関東大震災の復興計画の一つとして整備された。駅から近く地域駐車場としての役割をもっていたり、地下にギャラリーがあるなど、キャラクター性をもっている。堤防を降りると隅田川の向こう岸に東京スカイツリーなどを望むことができ、休日問わず観光客で賑わっている。

地域性と問題点

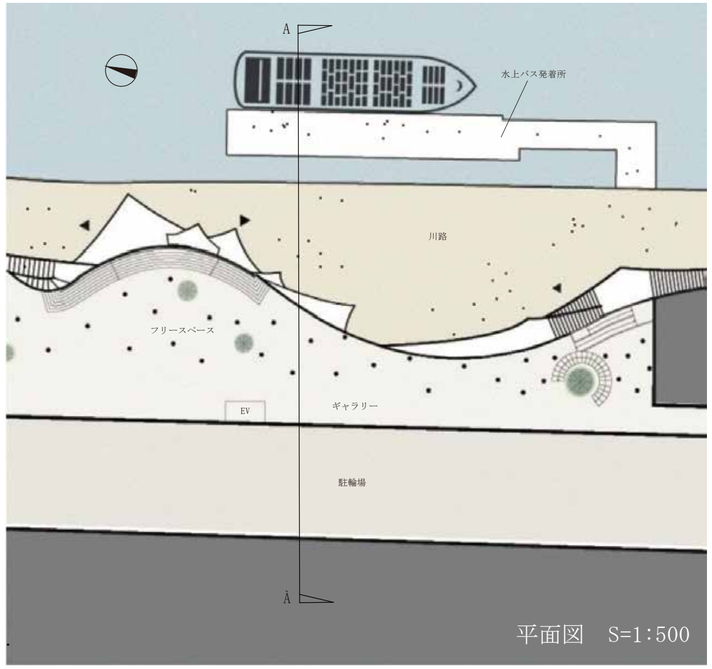
浅草は大正時代頃まで文化の中心として栄え、現代でもその町並みは残されておりその”日本らしさ”から外国人観光客の集まる人気観光地となっている。人々の注目を集める場所となった一方で、かつてのような**新たな文化の発信地**という側面を失いつつある。



地下空間が、船着場を起点としてその延長線上に配置されているため訪れた人を自然な流れで誘い込むことができる。水辺の解放感と堤防の**レベル差**を活かし、視線の変化を利用してより **GL を意識させる**。



A - À 断面図　S=1:200

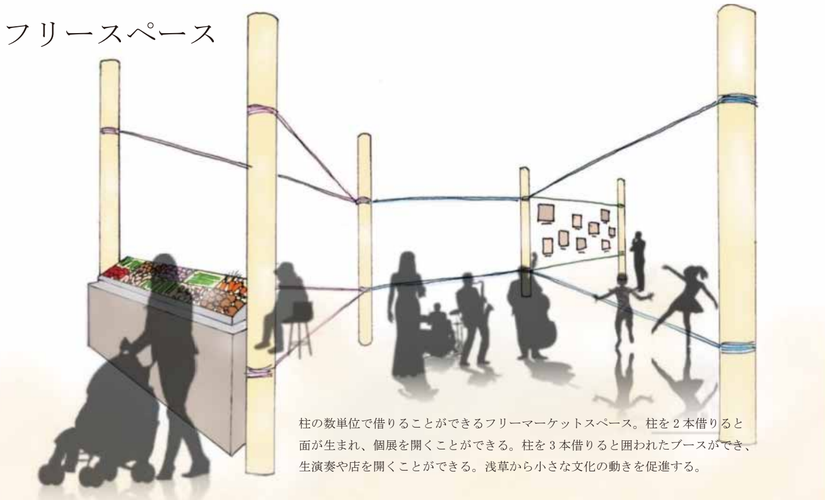


平面図　S=1:500

ギャラリー

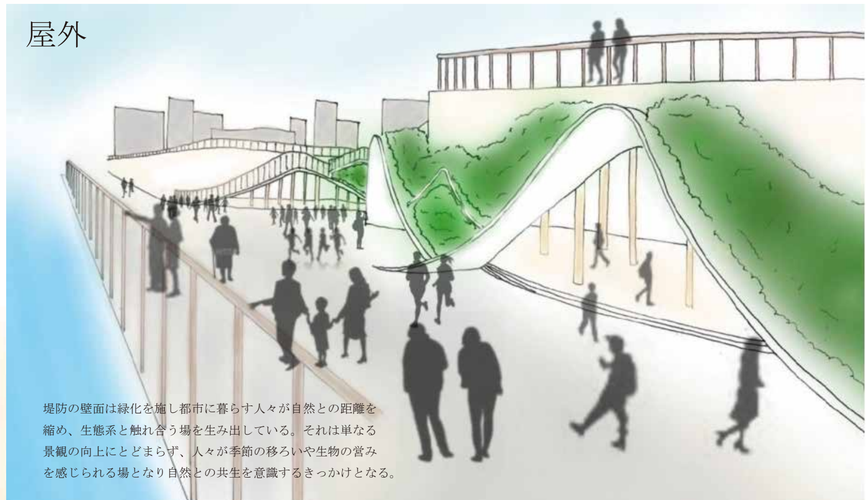
ギャラリーには浅草が文化の中心であったころの伝統工芸品を展示し、街の記憶を取り戻す。浅草の元からあるギャラリーの機能を活かしつつ、一辺の壁をなくしギャラリーとフリースペースの境界をあいまいにすることで繋がりを持たせた。

フリースペース



柱の数単位で借りることができるフリーマーケットスペース。柱を 2 本借りると面が生まれ、個展を開くことができる。柱を 3 本借りると囲われたブースができ、生演奏や店を開くことができる。浅草から小さな文化の動きを促進する。

屋外



堤防の壁面は緑化を施し都市に暮らす人々が自然との距離を縮め、生態系と触れ合う場を生み出している。それは単なる景観の向上にとどまらず、人々が季節の移ろいや生物の営みを感じられる場となり自然との共生を意識するきっかけとなる。